

1 横欠環境保全の会（雫石町）

(1) 活動のポイント

- 「からかさ松」や「水芭蕉の群生地」の保全、「フラワーロード」の整備など、子どもからお年寄りまで集落ぐるみの活動を通じて、地域伝統の継承や都市住民が訪れる集落づくりなど、目指す姿を共有。
- 地域巡回による荒廃農地の刈り払いや、営農組合と連携した耕作放棄地の解消、地域総出での水路・農道の保全を実施。
- 結の精神のもと、自治会や子供会、婦人会、有志組織など様々な集落内組織と一体的な活動により、世代間、住民間の交流を促進して地域を活性化。

(2) 現地調査における主な質疑

委員（質問・意見等）	集落（回答等）
・町場に近い環境の中、集落の人達の仕事や時間の使い方などはバラバラであったと推察されるが、なぜまとまることができたか。	・元々、「結」の精神で助け合ってきたが、洪水などの災害対応がきっかけとなり集落内の様々な組織の結びつきが強くなった。
・地域の伝統を次の世代に引き継ぐための取組として、どんなことを考えているか。	・集落内の小中学生は数名といった現状であり、隣集落の子ども達にも入ってもらいながら取り組んでいる。 ・また、みんなの声を聞きながら活動することが大切と感じている。
・外からの移住について、雫石町は県内で最も恵まれた条件と思われるが、そういう状況はあるか。	・移住希望の話はないが、ミズバショウや「からかさ松」、フラワーロードが観光コースの中に入るよう案を持ちながら取り組んでいる。
・農用地の作付状況のうち、その他約 3,600a の作付は何か。	・牧草が主。
・ミズバショウや「からかさ松」、フラワーロードなどの中で、集落で一番の自慢を挙げるとすれば何か。	・子どもから老人まで、全員で取り組んでいるフラワーロードが挙げられる。
・リーダーが集落の足りないところを意識して、情報発信やアピールしながら取り組めば、もっと良い取組になると思う。	

(9.30 現地調査写真 横欠環境保全の会)



取組に係る説明・質疑



「水芭蕉の群生地」及び散策路の視察

2 町井集落（花巻市東和町）

（1）活動のポイント

- 地域の働き盛り世代の集まり「若だんな会」が中心となり作成した将来ビジョン「アグリ・フレンド in 町井」によりレストランや直売所の設置、都市農村の交流拡大など、目指す姿を共有。
- 農事組合法人「町井アグリフレンド・ファーム」を中心とした営農活動や耕作放棄地の発生防止活動、水路・農道の保全のほか、非農家も含めて集落全体で環境を整備。
- 「新生若だんな会」や女性が参画しながら、カブトムシを活用した都市住民との交流拡大や、米粉パンの製造販売など、集落ぐるみの創意・工夫により地域資源をフル活用して地域を活性化。

（2）現地調査における主な質疑

委員（質問・意見等）	集落（回答等）
<ul style="list-style-type: none"> ・「若だんな会」を次の世代の「新生若だんな会」に引き継いだ要因は何か理由は。 	<ul style="list-style-type: none"> ・親の活動を子どものときから見てきたからと考える。
<ul style="list-style-type: none"> ・小さな集落でありながら、世代を超えて活動していくためのコツは何か。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小さな集落だからまとまりやすい。 ・20年前に策定した構想「アグリ・フレンド in 町井」はまだ実現していないが、夢を持ちながら取り組むことが大事と考える。
<ul style="list-style-type: none"> ・耕作放棄防止の取組では「若だんな会」もかなり見回りなどに出ているのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・転作ではどうしても売れるものは何もできなかった中で、中山間直払いの制度が始まり耕作放棄地が出ないよう畦畔の草刈りや農地保全に取り組んできた。若だんな会のメンバーも多くが参画している。
<ul style="list-style-type: none"> ・恵まれた条件を活かしての取組であり、県内の典型的な中山間集落の取組のひな形に成り得るかというところがあるが、何か苦労した点はなかったのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昔は小さな湿田しかなかったのをここまでにしたものであり、はじめから恵まれていた訳ではない。農業のみ、又は農業プラスαで何とかできるよう取り組んできた。資源はそれぞれにあり、知恵と工夫により手をかけて優良な資源になると思う。
<ul style="list-style-type: none"> ・農業が担い手や農地を確保しながら地域産業の核となっていく場合、人口の構成が重要だが、子ども達の状況などはどうなっているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども達は減少傾向にあり、ここで農業をする人たち一人一人がどう考えるか大事な場面。小さな集落で政策も絡みながら本当にやって行けるのか探りたいし、色々な挑戦をしていきたい。
<ul style="list-style-type: none"> ・人口構成の手立て、グリーン・ツーリズムや移住促進など、この恵まれたところでさえそこまでやっているというところがあるよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新規就農を希望して東和に来ている地域おこし協力隊の人達や明治大学の学生との話し合いなどを始めており、将来的に「だからここにすみませんか」というところに発展すればよいと考えている。
<ul style="list-style-type: none"> ・外から来る人達に柔軟に対応する一方で、元々の家や一族、集落の大事さを子供たちに伝えながら、もう一度その点がしっかり機能するよう、情報発信したり行政と一緒にやりながら取り組んで欲しい。 	

(9.30 現地調査写真 町井集落)



「おでって工房」(左) 及び米粉パン (右)



協定農用地の栽培・管理状況の視察

3 ふる砂徳集落（一関市藤沢町）

（1）活動のポイント

- 小学生の農作業体験や、収穫祭、景観保全活動など集落ぐるみの活動を通じて「次世代につながるふる里づくり」について共有。
- 高齢化や後継者不足に対応するため、複数集落が統合して「農事組合法人ふるさとファーム」を設立し、当法人を中心に耕作放棄地を防止や水路・農道の保全を実施。
- 農作業体験や、収穫祭、景観保全活動を通じた世代間交流、住民交流の促進のほか、Uターン受入れ、女性が中心となった施設園芸や「ピーマン味噌」の商品化などに取り組み、地域を活性化。

（2）現地調査における主な質疑

委員（質問・意見等）	集落（回答等）
・ さなぶりや収穫祭など、一度すたれたものを復活させたのか。	・ それぞれの家でやっていたが、子ども達が農作業する機会も少なくなった中で、お年寄達と田植え体験をする取組が始まり、収穫祭なども地域全体でやるようになった。
・ お祭りへの参加者は多いのか。	・ 収穫祭には子どもたちも集まり集会所がいっぱいになる。さなぶりは半分程度だが、年々増えてきている。
・ 一度外に出た人に帰ってきてもらえる地域づくりということが、今はどれくらい戻ってきているか。	・ 去年は関東から教員退職者が1名戻ってきた。別分野で培った経験や視点など、素晴らしい力を持っている。特に、団塊の世代の人達は農業志向が強いので有望。
・ 帰ってくる人のため農地を守る約束はあるのか。	・ 農事組合法人が農地中間管理機構を通して農地を守る形。集落全体で守っていくことで取り組んでいる。
・ 中山間直接支払制度への取組により農業生産で増やす部分は何か。	・ 基本的には米であり、農事組合法人が中心となり担う。これで手の空いた人が施設ピーマン等の園芸に取り組む。
・ 複数の集落が一緒になり協定を拡大しているが、自発的なものなのか、働きかけをしたのか。	・ 働きかけも行っているが、ここの取組を見て一緒になりたいという自発的なところが大きい。
・ 中山間直接支払制度を上手に受け止め経営体を作っている点で優秀な取組だが、後継者対策として将来を見据えた取組をしているか。	・ 後継者が帰って来ないかもしれない中で始めたのが法人化の取組。当面はリタイヤ組が農業を守り、そのうち若い人が現れることを期待している。
・ 自然、景観、環境を含めて集落を守っていくには都会から戻った人たちだけでなく、ここで育ったひとたちが守っていくことが重要であり、この点を掘り下げて取り組んで欲しい。	

(9.30 現地調査写真 ふる砂徳集落)



取組に係る説明・質疑



ピーマン施設の視察（左：女性・加工部門担当 菅原トヨ子さん）